

令和 2 年 6 月 22 日現在

機関番号：17101

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02502

研究課題名（和文）イギリス・ロマン主義文学における「身体性」のレトリックと革新性

研究課題名（英文）The Rhetoric of Physicality and Rebellion in English Romanticism

研究代表者

後藤 美映（GOTOH, Mie）

福岡教育大学・教育学部・教授

研究者番号：20243850

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、イギリス・ロマン主義文学において援用される身体性に関わるレトリックが、18世紀から19世紀初頭にかけて確立されていく解剖学、脳科学といった医学的言説と密接に関連し、革新的な詩的言説として呈示されたことを明らかにした。特に、身体の部位が神経と脳によって、全体として「呼応」し、調和するという、近代的な身体像を基軸にした詩的レトリックが、いかに革新性を内包していたかを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来のロマン主義文学研究は、精神的超越性や理想的美をロマン派的創造性の核として見なし、それによって人間性の肉体的、物質主義的側面を抑圧してきたことは否めない。しかし、本研究において、ロマン主義文学が、いかに医科学的言説と密接に関連し、「身体性」を鍵にした詩的レトリックによって、新たな人間性のヴィジョンを呈示したかについて明らかにした。こうした人間性のヴィジョンと言語の機能についての新しい見地が、学術的に果たした意義は大きい。

研究成果の概要（英文）：This research project examined how the poetic rhetoric in English romanticism could inherently involve the corporeal world, having interconnectedness with contemporary medical discourse cultivated through the anatomy and the brain science from the eighteenth century to the early nineteenth century. The Romantic rhetoric had a wider origin in the contemporary innovative approach to the body, which triumphed its core emphasis on the brain and the nervous network to organize the entire regions of the body. In this way, the interaction between medical science and poetry implied the rebellious urgency for liberal knowledge.

研究分野：英文学

キーワード：イギリス・ロマン主義 医科学 身体性 美学

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究の学術的背景

近年のロマン主義文学研究は、当時の社会的、歴史的な文脈の中でも解剖学、脳科学といった、18世紀から19世紀初期にかけての最新学問領域であった医学的言説との関連性を背景に、解釈の可能性を拡げつつある。具体的には、脳、神経、性、感受性、健康と病、生命といった視点から、またそれを敷衍した環境、食餌、人種、認知科学といった観点にいたるまで、「身体性」を鍵にロマン主義文学の新たな読みの可能性が呈示されつつある。

特に当時の科学によって大きく読み替えられた、ロマン主義的な身体像は注目に値する。歴史的に遡行すれば、デカルトの心身二元論やニュートンの還元主義的機會論によって構築されてきた機械的身体を超えて、18世紀のジョセフ・プリーストリー、エラズマス・ダーウィン、チャールズ・ベルらによって拓かれていった、生命 (animal spirit) と神経による有機的、かつ包括的な身体像が、ロマン派の身体論の舞台となる。また、こうした新しい科学的言説として医学が台頭する中、1815年成立の薬剤師法 (Apothecaries Act) にみられるように、ロマン主義の時代は、医学や医者が職業として社会的認知を得るようになった時期である。このような医科学の転換期と、文学がロマン主義という特徴を付与され、18世紀の啓蒙主義的思想から大きな変容を果たし、社会改革を目指す時期とは重なっている。したがって、科学による変革と言語による変革とが符号する時、それは、人間と社会、あるいは社会と言語との結びつきを一新させる歴史的思考のパラダイムの変容が起きていることを示しているのであり、ロマン派の詩の再解釈のターニングポイントを見出すことができるのである。

(2) これまでの研究の経緯

本研究の着想に至るまでは、ロマン派第二世代の詩人たちが、イギリスの美学的政治的改革を企図し、イタリアを詩的源泉とし、特に近代文学の父としてダンテを範にし、新しい「ヨーロッパ」文学の創出を希求したことを論じてきた。さらに、ロマン派第二世代の詩人たちが「オリエン」を受容することによって、いかに美学的政治的改革を目指したかについて研究を進めてきた。こうした「イタリア」、「オリエン」といった地政学的トポスに共通する点は、当時の「イギリスらしさ」を支えた正統な文学的規範を逸脱する要素を内包するという点である。さらに今回研究の主眼に置く「身体性」という要素は、19世紀初頭において、文学的伝統によって涵養されてきた、節度ある、礼儀正しい美学的「趣味」を元にした創造性の埒外に置かれていたということである。

したがって、「イタリア」、「オリエン」に加え、「身体性」という要素が、伝統的な創造性の規範を逸脱するが故に、いかに革新性を保持していたかという逆説によって、ロマン主義文学の詩が自由主義的思想を根幹に据え、その革新性を備えていたかが明らかになる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、イギリス・ロマン主義文学において援用される身体性に関わるレトリックが、18世紀から19世紀初頭にかけて確立されていく解剖学、脳科学といった医学的言説を淵源としていることを明らかにすることである。さらに、そうした文学と医科学との密接な関連を示す身体的レトリックが、革新的な詩的言説と人間性を呈示することを明らかにすることを最終目的とする。具体的には、ロマン主義文学において、身体は捨象すべき対象ではなく、創造性の基盤であったことを読み解き、当時の医科学的知見に基づく身体性を基軸にしたレトリックに、新たな人間性の解放の契機が宿ることを論証する。

3. 研究の方法

(1) 2017年度

2017年度の研究は、18世紀から19世紀初頭にかけての医科学に関連したテキストを中心に文献の収集と精読を行うことを主眼とした。具体的には、カナダのブリティッシュ・コロンビア大学附属図書館において、19世紀初頭における第二次科学革命と呼ばれる、化学、解剖学、生理学といった医科学の興隆の状況と、そこにいたる医科学の歴史的変遷について考察するための資料収集とその精読を行った。特に、医科学の歴史的文化的な位相空間が、ロマン主義文学とどのような関係を取り結ぶのかについての考察を進めた。

また、従来より研究課題としていた「イタリア」がロマン主義文学において表象するものとしての革新的創造性について、今年度からの研究課題である「身体性」と結びつけて、最終的な成果としての論文作成を行った。

(2) 2018年度

2018年度は、前年度に収集した研究文献・資料の不足を補う資料収集を行った。特に、大英図書館において、18世紀から19世紀初頭の医科学関連の第一次資料を中心に調査・収集を行い、アストリー・クーパー、ジョン・ハンター、ジョン・セルウォールらの医科学的著作を精読した。

また、これまでの考察をまとめ、海外の学術雑誌への論文投稿を行ったり、日本英文学会九州支部大会において、シンポジウムを企画し発表を行ったりすることによって、これまでの研究の途中成果を問うという方策を取り、研究の内容や方向性についての確認を行った。

(3) 2019年度

最終年度である2019年度は、これまでの研究を具体的にまとめ、国内の学会での口頭発表や学会誌等への論文の投稿を中心に成果を発表した。学会での発表のうち、特に Biopoetics and Poetics Workshop (於九州大学) は、ニュージーランドの研究者と国内の外国人研究者らとの共同研究であり、研究の方法として、国際的な研究協力やフィードバックによって研究を進めていくという、新しい方策や知見を得ることができた。

4. 研究成果

本研究においては、当時の社会的、歴史的な文脈の中でも解剖学、脳科学といった、18世紀から19世紀初期にかけての最新学問領域であった医学的言説と、イギリス・ロマン主義文学の詩的レトリックがいかに密接な関係を持っていたかを明らかにした。そして、こうした詩的レトリックが、新しい身体像や人間性の在り方についてのビジョンを呈示し、その革新性によって、いかに近代的な知の構築に貢献したかについて、以下の3点の視点から成果を得た。

(1) 19世紀初頭の医科学における新しい身体像

19世紀初頭の医科学の言説の中でも、解剖学的、生理学的見地に立つ、アストリー・クーバーの実証的身体観を考察した結果、特筆すべきは、身体の部位が神経と脳によって、全体として呼応し、調和するという循環的な身体像を打ち出していることを見出した。この革新的な身体像は、ニュートンの機械的身体像を超えるロマン主義的、有機的身体といえ、神経と脳の働きを発見したことによって、分断された精神と身体を統一体として捉えた、時代の革新的思想でもあったことを考察した。

(2) 当時の革新的医科学の言説と詩との密接な関係

さらに重要な点は、(1)におけるこうした医科学的知見が、ウィリアム・ワーズワス、サミュエル・テイラー・コールリッジ、パーシー・ビッシュ・シェリー、ジョン・キーツらのロマン派の詩において、身体的イメージや詩的テーマとして反映されていることであり、文学テキストが知の啓蒙の手段として有効に機能していたことを示す点である。すなわち、医科学の革新的知識は、身体という医科学的領域の統一体だけでなく、社会という統一体にも影響を与えるものであり、ロマン派の詩は、そうした二重性を基に、新しい身体観が映し出す人間像や革新的思想をレトリックとして世に問うというものであったと言える。具体的な研究の成果としては、こうした医科学的言説は、ワーズワスやコールリッジ、キーツらの詩や散文において、表象的に援用されていることを考察した。特に、キーツの詩の中で、医科学に基づく革新的身体観が、流動的、形成的な身体イメージとして描かれ、人間の内奥を、独自の身体的イメージによって提示していることを明らかにした。

また、さらに重要な点として、このような医科学と詩の言語との密接な関連に基づく新しい身体像は、自由主義的な知の循環やネットワークを信奉するロマン派詩人らの哲学とも通底していたことである。特にリイ・ハントら第二世代の詩人達によって、普遍的善として、また社会改革の根本として捉えられた18世紀的理性主義が、地政学的空間における知の自由な循環を志向するという点において、身体空間の中の循環と呼応する。すなわち、知の自由な往来や循環は、慣習的に固定化された伝統的価値観を打破することであり、機械的身体観を凌駕する有機的、親和的な身体像とともに、人間性の自由主義思想を司るものであり、共に、社会改革のための新たなヴィジョンを内包している。このように、当時の医科学的発達とその知識に基づく新しい身体観が、ロマン主義文学の「身体性」のレトリックと革新性と密接な関係を取り結んでいることを明らかにした。

(3) イギリス・ロマン主義のレトリックと革新性

身体性に基づく詩的レトリックがいかに革新性を保持したかについては、18世紀に形成され、19世紀に受け継がれることになる美学的趣味論から説き起こされた想像力の定義と、それに対抗した趣味概念を呈示したロマン主義のレトリックとを対照的に捉えることによって、その革新性を明らかにした。

18世紀の趣味論にみる創造性の核は、「霊的昇華」、「自己の客観化」といった形而上学的語句に象徴される、非身体性に求められたといえる。しかしその後、19世紀初頭におけるロマン派の詩の変革は、当時の医科学的発達とともに台頭する身体観の変革と軌を一にするものであり、詩に表現される人間性の表象の背後には、身体のイメージが基盤として存在した。したがって、具体的には、18世紀の趣味論から19世紀初頭のロマン派の詩作までにおいて鍵語となる taste についての考察を行った。美学用語としての taste は、非身体的創造性を担う「趣味」と、直截な身体性を保持する「味覚」との両義性を備えた語として捉えられ、身体と詩の創造性についての重要な鍵を握る語である。

具体的にはまず、ジェゼフ・アディソン、デイヴィッド・ヒューム、シャフツベリー、ジョシュア・レノルズら18世紀を代表する文人による趣味論の言説を通して、いわゆる「礼儀正しい」、節度ある自己という非身体性に基づく美学の体系を捉えた。そして、次にジョン・キーツの詩作を中心に、18世紀の趣味論とは対照的な味覚と消化をめぐるイメージを考察し、身体と詩の創造との密接な関係を明らかにした。このことによって、節度を旨とした趣味には収まらない、キ

ーツの詩作における感覚的、個別的な身体的経験を基盤とした創作性こそが、詩的改革の契機を孕んでいることを論証した。このように、19世紀初頭の詩作において求められた正統なる「趣味」という美学概念を侵犯し、直截な身体性を保持する「味覚」という感覚に基づく詩作の創造性とその革新性を明らかにした。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 後藤 美映	4. 巻 94
2. 論文標題 感情の美学における視覚性と身体性ーキーツの『ハイペリオン』におけるダンテの受容と詩の改革	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 英文学研究	6. 最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 後藤 美映	4. 巻 69
2. 論文標題 身体の詩学と革新性 ジョン・キーツの詩における詩的昇華/消化の美学	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 福岡教育大学紀要	6. 最初と最後の頁 19-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Mie GOTOH	4. 巻 69
2. 論文標題 The Romantic Reception of Dante and the Configuration of "Europe"	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Bulletin of University of Teacher Education Fukuoka. Part I, Language and literature	6. 最初と最後の頁 31-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Mie GOTOH	4. 巻 61
2. 論文標題 The Poetics of Corporeality: Keats, the Brain and Liberal Knowledge	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Studies in English Literature	6. 最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 後藤 美映
2. 発表標題 身体の詩学と革新性 ジョン・キーツの詩における詩的昇華 / 消化の美学
3. 学会等名 日本英文学会九州支部第71回大会シンポジウム「詩と革新」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 後藤 美映
2. 発表標題 ジョン・キーツの詩における「味覚」のメタファーと身体性
3. 学会等名 九州山口イギリス・ロマン派文学研究会 第46回 夏季研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Mie GOTOH
2. 発表標題 Romantic Medical Science and Poetry
3. 学会等名 Biopoetics and Poetics Workshop (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Mie GOTOH
2. 発表標題 The Sympathetic Body and Liberal Knowledge in Keats's Poetry
3. 学会等名 Romantic Studies Association of Australasia 2019 Conference, Embodying Romanticism (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----